

巡礼の年

2017年10月13～20日まで、ワルシャワ、プラハ、ブダペシュトをめぐるなかで心に浮かんだ言葉をそのままに書きとめた散文。

井坂康志

【目次】

前口上——巡礼の年

聞こえる

斧

入国審査

タクシー運転手

ワルシャワ文化科学宮殿

小径

平原の国——ポーリン

ポーランド・ユダヤ歴史博物館

積堆場への行進

花のように

君に——月の詩

ブリキのお椀

ポヴォンスキ墓地・L 区域——呪われた死者たち

君の名はアンジェイ

トラム

ツィタデラ

英雄ポロネーズ

ワルシャワ中央駅へ

ブラハへの鉄路

反転

ユダヤ人街

ボヘミアの平原

カフカと悪夢

小さな夜の音楽——アイネクライネナハトムジーク

私が大学に入った頃

死と月

説教詩

ブダペシュト東駅

デンピンスキー通り

メズーサ——ブダペシュトのシナゴグにて

鎖橋

レインコート団

窓辺にさく

ブダペシュト中央市場

前口上——巡礼の年

これは諸国一見の僧にて候
このたびはワルシャワの巡礼の旅に出なばやと
遠き旅路をたどり申し候ほどに
プラハの都を見ざりしかば
鉄路にて移送の道をさかのぼりて
ついでにてはブダペシュトのシナゴークに詣でばやと存じ候

破り捨てよ、地図を
旅人よ
君の旅のはじまりだ

無明の闇の兆しを
心の芯で受け止めよ
遠い記憶だけを友として

霧に導かれ
森の声に耳を澄ませて
旅人よ
君は旅を続けるだろう

そこでは
思い出は神殿となり
生活は神話となる

魂に配慮せよ
旅人よ
旅をつづける者よ

くだらぬ流行には一瞥もくれるな
あらゆる軽薄な思潮や
軽口や嬌笑を
心の底から軽蔑せよ

君を支えるのは何か
君を根底から養うものは何か
そればかりに思いをはせよ

ゆけ
旅人よ

聞こえる

声が聞こえる、声が
海の向こうから
砕け散る波濤を越えて
声が聞こえる

遙か緑なす平原から
月に泡立つ海原を抜け
極東の地まで

輪廻を越え
刻を重ね

声が聞こえる、声が
海の向こうから
砕け散る波濤を越えて
声が聞こえる

斧

せんまい仕掛けの斧が
きりきりと落ちてくる
ロープは時に耐えかねて
腐りかけている
つるべが井戸の底に落ちていくように
大きな夕陽が水平線に沈むように

ワルシャワの秋
ワジェンキ公園
マロニエの実
噴水と革命の残り香
挫折した時代
打ち砕かれた都市

死者たちは死んでいない
死とともに生き
叫んでいる
だから

あの海上を抜けて
乾いた風に乗り
ひたすらやさしき前世の回廊を抜けて

入国審査

ここは北京国際空港
乗り換え口
温かく濡れた天井
地下の暗い水の
異国のトンネルを伝って
革命を逃れる民衆のように
じくじくと滲みだしている

審査官の目は
寡婦のため息に似て
暗くかびくさい
誰もが通りつつ
いつかきたことを
忘れてしまう

私たちの搭乗口は

どこにあるか
記憶されることを
同時に忘却をも
拒否し続け

拒否し続け
夢と現の境界（リンボ）にて
数十人が列をなし
地獄の業火を免ぜられず

重たいゴム印の音ばかりが
ブラームスのティンパニのように
暗い片隅にこだまする
列の最後尾は永遠に思える

なのに一度出てしまうと
世にこんな場所があったことさえ
人は瞬時に忘却してしまう

タクシー運転手

初秋のワルシャワのタクシー運転手ほど
かなしい目をした人種はいない

もしドイツ・ロマン派の画家だったら
少々腕は鈍かったとしても
きっと細かく流れる街並みを
気ままな心のたわむれに
スケッチしてみるのだろう

私は機中で眠れず
眠気をつど否定するような
中間的空間にいた
生きても死んでもいない
ただ浮かんでいただけ

空港で私は君に出会った
埃っぽいブルーのドイツ車の前で
ものうくたばこを吹かす君
こうして私は君のつかの間の客となった

「メルキュール・グランドまで」
君はおもむろにラジオのヴォリュームを上げる
ラジオがかかっていたのに
なぜか気づかなかった私だ

二人の若いDJがかけあう
やがて「ピリー・ジーン」が流れ
見知らぬポーランドの時が重ねられる
この異様なビートが世界を巡ったとき
君はきっとこの国で生を受けた
いまだ優しい独裁者たちの腕に寄り添い
世界とはかくあるものと信じて育った

遠い極東からきた私でさえ
知っているのだ、そのことを
なぜ知っているのかとは
問わないでほしい

問わないでほしい
なぜ知っているのかと
君たちが戦い続けてきたことを
誰にも知られぬ孤独を
友としてきたことを

やがてラジオは「レット・イット・ビー」に変わる
私も思い出す
ビートルズをはじめて聴いた日のことを
マイケル・ジャクソンのダンスを目にした日のことを
あれは世界の終焉を予兆させる
鳥の声だった

今にしてわかることは
わかったときにはぜんぜん役に立たない
空は毒ガスの霧の濃く
軍人基地を抜ける紅の林

それ以上口にすべきことは
もう何もないかもしれないね、お互い
40 ズロチ、ささやかだが、お釣りはいらぬ

ワルシャワ文化科学宮殿

あの天をつく構造物
大小のにしんを百万体束ねたような
地に下りたラピュタのような
邪悪な巨人の奏でるパイプオルガンのような
文化科学宮殿を横目に
私はワルシャワ中央駅へと急ぐ

10 月中旬の空気はつめたい
市民は薄手のジャンパーをはおり
毛糸の帽子を目深くかぶる人もいる

最初に降り立った日
そう、クラクフからの数時間を経て
夕日に融解するワルシャワ中央駅を目にした

ブリヂストンの巨大な広告看板の
妙に目に付いたものだが
今はきれいに取り払われて
街全体には外資系保険会社の巨大なビルばかり
しんしんと目に入ってくる

文化科学宮殿
拒否不能な贈り物にして

払拭不能な呪い

それは変化を最も柔らかい内面で受け止め

最も堅い形相で具現する

小径

パリバ証券とサムスン電子のビルを抜けると

遠い潮騒を聴くように

トヴァロヴァ通りの黄色いトラムが

走り抜けていく

ワルシャワ蜂起記念館を横目に

古い大通りを北に歩く

やがて小さな一角

オポコヴァにいたる

(それにしても、街や通りに女性名を冠するのは

まことに似つかわしく思える

命脈は街にあり、議会にあるわけではないから

いくら選挙用ポスターを凝視しても

候補者の人となりはわかりようがない)

ひどくのどが渇く

コーヒーが飲みたくなる

焙煎のきいた焦げ臭い

ヨーロッパのコーヒーが飲みたくなる

目の前には煉瓦の壁

ユダヤ人墓地

アダム・チェルニアコフの眠るつめたい地面

ここはワルシャワ・ゲッターの飛び地で

特別にユダヤ式に葬ることが許可されていた

(さすがにゲシュタポも死者たちにはかなわなかった)

空気を圧するような林立する死者たちの存在を

煉瓦の向こう側に感じる

コーヒーを飲むように
いくぶん口をすぼめて
死者たちは遠い世界の韻文を
何度も繰り返す

(わかってはならぬと彼らは言う
わかってはならぬと
ただ言う、マッチをすれ、すり続けよと
彼らは言う
何度吹き消されようとも
マッチをすり続けよと
わかってはならぬと)

墓地の門はくぐらない
そこは死者たちの世界であり
まだ私はその一員ではないのだから
代わりに墓地脇の小径に入り
小川の水に足を浸すように
ベンチに腰掛ける

この一角だけずっと気になっていた
小径だけ多色の水彩画で描かれているように
「フィガロ」のソプラノ・アリアのように
時がいきいきと流れる
老婦人は小さな黒い犬と散歩する

未来は小径なのだを知る
小径でなくてはならぬと

平原の国——ポーリン

古代の鼓動が聞こえる
君のなかに
キリスト教よりもっと古くて

確かで、温かな鼓動

地下を流露してやまぬ
温泉脈のような
神々がときに麗しき肉体をまとい
天上から人々に一瞥をたまわりし
あのときを

はるかギリシャ、あるいはアトランティス
南洋の蒼き海原
陸地としてよみがえり
今緑なす丘や川となる
民はふたたび
カナンの安息を見いだした

当地の人はただ一語をもって
その正しさを語る
名は平原の国

ポーランド・ユダヤ歴史博物館

かつて草原だった一角
その前はワルシャワ・ゲットーの中心街に
ポーランド・ユダヤ歴史博物館の建つ

常設展示「ポーランド・ユダヤ人千年の歴史」
膨大で緻密な展示物は
研究というより叙事詩
叙事詩というより神話を思わせる

北方に出現したギリシャ精神の地は
ユダヤの民を受け入れた

(ユダヤの民よ来たれ
われらは汝を受け入れるであろう

汝らはとこしなへに
安息の地を見出すであろう)

クラクフ、ウッチ、ポズナン、そしてワルシャワ
神話の地、やがて
蜜の滴る地となる
子鹿のような丘を湛え
緑なす草原と森
ヴィスワの流れ
人魚たちの歌い交わす声

千年前この地で
旧約の預言は実現した

(「こんな小さな街にもユダヤ人が?」
「そうよ。こんな街にもよ。通りの裏に墓地があってね、ユダヤ人墓地よ。
今は荒れ果てているわ。
もとは肉屋だったユダヤ人の大邸宅があってね。
一人きれいな娘さんがいたんだけど、どこかのお金持ちと結婚したって」
「ユダヤ人はこの街の何を握っていたのだろう?」
「何をって? この街のぜんぶ、いえポーランドのぜんぶに決まっているじゃない」)

時が流れ、政治家を輩出し、貴族にまで列せられる者が出る
ポーランド・ユダヤ人の最終解決はやがてやってくる

破滅とは反転した成就でもある
白魔術と黒魔術
預言の裏と表
逆さになった生命の樹

私はそれを「斧の年」もしくは「いなごの年」と呼ぶ
あるいは死のなかの生、生のなかの死と呼ぶ

積堆場への行進

低いティンパニが
だん・だん・だん・だん・だん
リズムを刻む
水たまりをくすぐる
重いコントラバスのピチカート
一人の大人を先頭に
子供たちは前を向いて

積堆場に進んでいく
いくつもの影が
ワルシャワの目抜き通りを
いくぶん前屈みに
将校たちの鞭と罵声の中
運命に導かれるように
だん・だん・だん・だん・だん

曇天と鈍い風、飛び散る泥
ティンパニはやまない
ブラームスはこの日のために
交響曲一番を作曲していたかのように
だん・だん・だん・だん・だん
昨日できた水たまりに
不吉な幻影が映っている

ものいわぬ死者たちのように
あるいはとさつ場に引かれる牛たちのように
一本の鉄路の果て
あの積堆場に歩いていく

鉄道は死の比喩ではない
鉄道は死そのものだ
鉄道が死を呼ぶのではない

死が鉄道を発明した
鉄道はつれてくる
鉄道は送る
鉄道は殺す
だん・だん・だん・だん・だん
枕木の焦げた匂い
コンクリートの生乾きの
はげかかったベンチ

トレ布林カへと向かう鉄路
緑の森の死者たちの世界へと
世界に不吉な一本の線が引かれる
定規で測ったようにまっすぐ
だん・だん・だん・だん・だん

積堆された枕木と
楡の木々が見ている
行進を
絶たれゆく聖者たちの
行進を

花のように

花のように両手を天に
かざそう
かなしくとも
やがて上る月のために

神様は見てくれるから
わらおう
かなしくても
やがて上る月のために

今日涙が出ても
いきつづけよう

空を見上げて
やがて上る月のために

瞳から落ちる
涙の筋を通してしか
わからないことも
この人生にはある

君に——月の詩

悲しいかい
月の詩をつくろう
それはこんなふうにはじまる

月に詩はいらない
月が詩なのだから

君に涙もいらない
君が涙なのだから

知ってか知らずか
潮の満ちくる晩
月はしずかに歌ってる
銀の波を揺らす
海は月の涙なのだと

ゆこう
涙の丘を
月の波を
このちいさな船で
漕ぎだそう

人生に旅はいらない
人生が旅なのだから

漕ぎ出そう
はてなき浜と
しののめの
蒼き更紗の
月の道

ブリキのお椀

ブリキのお椀とともに
彼女は生きていた
お椀は命だった
魂を受ける最後の器だった

朝お椀がなくなっていないか
持ち去られていないか
いつも不安だった
お椀は彼女のおなかの下に確かにあった

お椀があればほんの少しでも
豆のスープをもらえる
困った人の分をとってあげられる
少し恥ずかしいけど
小用だって足せる

お椀は命だった
ある早朝起こされて
トラックに乗せられ
ワルシャワはずれの
パルミルイの森に連行された日
彼女は身分証明書とお椀を携えた
どんなことがあっても
お椀と一緒につもりだった

彼女がお椀を手放したと同時に
魂が体を離れていった

小さい頃の屋根裏部屋のこと
懐かしい家族と犬のこと
ほんの少しだけ一緒に生活した夫のこと
すべてを思いだしながら

穴に落ちていくかすかな意識のなかで
彼女がこの世で最後に目にしたのは
ブリキのお椀だった

このお椀は今も
パヴィア刑務所博物館のガラスケースに
大切に保管されている

ボヴォンスキ墓地・E 区域——呪われた死者たち

こんな土曜の晴れた朝に
ワルシャワ外れの古い墓地を散策するほどに
自ら中をゆっくり流れる暗渠を
思い出させてくれるものはない

(私はここで発見された
私はまだ発見されていない
私はここで発見された
私はここで腕だけ発見された
私はまだ発見されていない)

祖国のためになやむのはむずかしい
しかしもっとむずかしいのは祖国のために行動することだ
さらにもっとむずかしいのは祖国とともに苦しむことだ
さらにもっとむずかしいのは祖国のために死ぬことだ
けれども何よりもむずかしいのは祖国のために生き抜くことだ

(私はここで発見された
私はまだ発見されていない
私はここで発見された

私はここで腕だけ発見された
私はまだ発見されていない)

呪われた死者たちが歌う
頬のこけたマリア像とともに
かえりみられることなく冷たい土になった
明け方の月のような死者たちが
今もボヴォンスキ墓地で空を見つめている

君の名はアンジェイ

教えよう
君の名はアンジェイ
家の名はラスキ
アンジェイ・ラスキ
ポーランドの古い家柄の男子
それが君だ

君はこの名を知らない
君はすべてを返却してしまった
パスワードも消去してしまった

そろそろ知っていいだろう
君は19世紀半ば
革命芸術家を気取って
反ロシア蜂起に荷担して
飄然とフランスに亡命した

ある寒い冬の晩
君はくだらぬ決闘で若い命を散らした
サスキ公園の噴水や
ショパンのピアノを思いながら
君の心臓は破れ鼓動することをやめた

君はもう一つの世界の住人になった

月だけが知っている
君が誰だったか

月にあこがれる
たったひとつの理由
あの冷たくて情熱的な月だけが
君の心を知っているから

ワジェンキ公園でマロニエの実をひろって
私をモデルに下手な絵を描き
ひとりよがりな詩を送りつけたり
黴臭いピアノをかなでたり
みんな君がしてくれたこと

もう一度いう
君の名はアンジェイ
アンジェイ・ラスキ

覚えておいてほしい

トラム

建物が街の体なら
トラムは柔和な風
一日乗車券を手に入れて
目的もなく
トラムに乗り込むと
風とひとつになったようだ

気の優しい猫科の巨大動物のように
くまなく街を巡りながら
花や水、人の体臭
懐かしいにおいをかいで

今こうして

トラムに揺られる

ツィタデラ

暴力を博物館に展示するなんて
これほど痛快なことはない
冷戦なんて後付けで
結局は脅迫といやがらせで
時間が刻まれてきただけだ
政府が暴力と手を切るなんて
蛙が水と手を切るくらい
非現実的だったんだ

ソ連がろくなものじゃないことくらい
軍服を反対に着てるやくざだってことくらい
人殺しの泥棒だってことくらい
この国で知らない者はなかった
だいじなのは反抗することじゃない
冷やして無力化して展示することなんだ
それが身に起こった不正を転じて
正義に変える唯一の道なんだ

血に染まる死者たちの声を聞け
ツィタデラやブルシュクフやカティンで起こったことを
何でもヒトラー一人に押しつけるのは馬鹿のすること
本当に怖いのは
保護者や援助者をかたってくる卑怯なやつらだ
バイカル湖の朝方に立ち上る黒い霧みたいに
悪魔の交合を経た邪なやつらだ

無数の十字架が
日々そのことを訴えている
沈黙という石のように固く
雄弁な呪文を通して

英雄ポロネーズ

かつてゲーテはポーランドのシマノフスカを愛した
シマノフスカのピアノは古い地底湖のにおいがした
キリスト教の堅固な壁からしみ出すその清冽な水のおかげで
ゲーテは古典的世界のアイデアをファウスト第Ⅱ部に描くことができた

王宮広場はずれの小さな写真展
知的障害の青年ばかりを撮影した不思議な展示
青年たちの目はアンバーのように透明で
シマノフスカの奏でた憧れを
宝玉に具象化したかのような

ショパンのピアノコンサートは
幻想即興曲にはじまる
素朴な演奏である
華麗な演奏である
地底に眠る玉を古い井戸水で洗った音がする
ペダルをほとんど踏まない
テクニックに頼らない
休符に懐かしい余韻がある

ワルシャワ王宮広場の一角に響く
ショパンの音
革命を避けて故国を離れた
この小男の音楽は
今も地底湖の水をもちあげる力強いつるべだ

何曲かのマズルカ、ワルツが交互に続く
そしていよいよ
ポロネーズ
しかも英雄のポロネーズだ
ポーランド風を曲名にもつショパンの代表作

冒頭に耳を澄ませよ

何物もさえぎることなく突き進む
平原を吹き渡る風のように
英雄ポロネーズは
一度徹底的にすりつぶれた魂に
形を与えてくれる
ちょうどこの王宮広場のように

1944年ポーランド王国の文化が
戦争で壊滅した後
ワルシャワ市民は再起を期して
昔の絵画からチョコレートの包み紙まで
あらゆるものを活用して往時の姿をとりもどそうとした
「壁のひびひとつにいたるまで」が合い言葉だった

英雄ポロネーズが心を潤し響きわたる
平原の風のように
海原に浮かぶ月のように
熱が戻り始める
壊死した細胞に生命の営みが始まる

アンコールは子犬のワルツ
生きることは舞踊なのだ

厚い石畳の上をステップを踏め
ゆるめつつ跳躍せよ
それは冬の日の木漏れ日のたゆたい
あるいはポロネーズのように
苦みを含んだ清明な鏡の上で

ワルシャワ中央駅へ

初冬のワルシャワの街を
中央駅へ急ぐ
半分湖面に沈んだ
失われた街だ

市民の眠る朦朧たる古い意識で
いまだ戦車は路面を踏みしだき
吊された死体が街灯に列をなしている

ワルシャワ中央駅
深海に生きる巨大甲殻類を
それは思わせる
君は時代の肉体（ボディ）だ

私はワルシャワ中央駅に急ぐ
刺す冷たさを肌に
暮れていく文明の青さとともに

ようやく動き始めた
トラムの轆音を
訪れた唯一のしるしとして

ブラハへの鉄路

ブラハまでの 8 時間
カトヴィツェ
チェンストホヴァ
オストロヴァ

私は昨晚
ギリシャ時代の青年が
川の畔で豎琴を弾きながら
ゆるやかな蟬の声とともに
神々の黄昏への追悼を歌うのを耳にした

鉄路もプラットフォームも
あの時代とさして変わっていないはずだ
真っ暗なワルシャワの街を出て
数時間もたたぬというのに

懐かしい平原と丘の交互に繰り返す

鮮血の葉の一点が
後期ゴッホをまねたように
魂に確かな痛みを残す

(一度だけ二頭の美しい鹿の
平原を駆けるのを目にした)

ブラハまでの 8 時間
カトヴィツェ
チェンストホヴァ
オストロヴァ

この鉄路が移送に供された
確かにそうなのだ
駅に着くたびに異国のアナウンスが告げる
次第に心は疲れ
東欧の子音ばかりのアクセントが痛みとなり
親しみのない顔立ちがいらだちをかきたてる

つまるところ
何をしてもしなくても
何も残らない
すべては消耗で
問題は消耗のしかただけなのだ

ブラハまでの 8 時間
カトヴィツェ
チェンストホヴァ
オストロヴァ

目をつむる
今までにあった印象的な人のことを
どちらかというと愉快とは言いがたかった思いを
どちらかというと愉快的な心持ちで思い起こす

そしていつか見た夢を思い出す
流れるのを忘れてしまった川の夢
泥に帰って行くように
汽車はプラハ中央駅に入っていく

駅前緑地にはウッドロー・ウィルソンの像が
古代ローマの英雄みたいに立っていて
その不吉なフォルム
悪夢は今も進行中と仄めかす

反転

君はあの城からやってきた
君に名はない
君は何者でもない

ただし、不幸なことというべきなのだろう
君は何者でもないという限りにおいて
何者かであるということだ
けれどもそれが何か
君は知らない

君はリセットされた反転であり
反転された仮想だ
君は何ももたない
君はあらゆるものであるから
何ももつ必要がない

反転の中でさらに反転すれば
鏡にもう一つ鏡をさしだすように
反転しつつ伸張し
万華鏡に似て
反転は新たな自由なる反転をつくる

だがこれだけは覚えておいてほしい
あえてたったそれだけのことを想像する者は
君が思う以上に少なく
いや反転の意味さえも
知らずに生きる者が大半だ

反転した街に
反転した月が昇る
反転した水車とともに
反転した街は
失われた街であるが
失われつつも死なず
死ぬことを許されず

人はそれを呪いと呼び
忌むけれど
反転を経由せずして
もう一つの隠し扉を知ることは
できないのだよ

ユダヤ人街

誰の心にも古い町（オールド・タウン）がある
当然にしてユダヤ人街があり、墓地がある
街は人の心に相似する

誰にでもさびれ果てたユダヤ人墓地で
楡の枯れ葉に取り巻かれ
ひたすら悲しんだ過去があるから
時に人はユダヤ人街に赴きたくなる

もっばら悪夢の中で

ボヘミアの平原

静かに流れよ
車窓をめぐる
ボヘミアの平原よ

愛は悲しみに似て
スメタナの旋律とともに
ボヘミアの平原はめぐる

つややかな川面に
なめらかな霧

楡の木は
影絵のようにうつむいて
やわらかなアダージョ

風琴のトライアングル
どこまでも
いつまでも

静かに流れよ
車窓をめぐる
ボヘミアの平原よ

カフカと悪夢

暗黒の沼から取り出されるのは
腐った自転車でも
ただれた皮膚でも
引きずり出された臓物でも
巨大生物の死骸でもなく

暗闇から取り出されるのは
病める魂の友

それは言葉だ

ブラハの夜に見る夢は
蒼き馬の翼
灰色のペンキ塗り
ゴーレムのうめき
ユダヤ人基地の囁き

太古の呪いの記憶への回路
堅くつややかなオーボエ
ラビたちのつぶやく連禱
夜に立ち上る霧
黒いアレグロの響き

小さな夜の音楽――アイネクライネナハトムジーク

かなでましょう
この小さな夜に
子供用のヴァイオリン
お父さんは宮廷の音楽師

熟れたいちじくの果肉のような
赤子の頬のような音を
畑から引っっこ抜いたかぼちゃみたいに
今かなでましょう

あの星たちに聴かせましょう
いつかは死ぬ身の私たち
この小さな夜に
子供用のヴァイオリン
レンズ豆のスープみたいな第二楽章
ブルガリアの舞踊みたいな第三楽章

夜とともに生きるのです
夢とともに生きるのです

子供用のヴァイオリン
幼くして死んだみんなのために
この小さな夜の音楽を

私が大学に入った頃

私が大学に入った頃
学生運動は遠くすぎ
IT革命には早すぎた
淡水と海水のまざった時代
汽水にして分水嶺の時

当たり前のように浪人し
たばこの匂いととも
暴力を日常として
本を読めば偉くなれると信じ
祖国は植民地ともつゆ知らず
憲法をマントラがわりに
誰をも右翼と左翼にわけて安心する

世界が嘘に包まれるとき
すべては正しく見える
ロックシンガーが反骨を歌い
マーケティングがうつろに再生産する

うららかな水たまりから
ゆっくりと流れを変えた
先は今も定まらずとも
偶然ながら
混沌の始まりを見たよろこびとかなしみ
今も消えることはない

死と月

パンクラクの地下鉄を出て
夕空に振り返る
白糸のような月が出る

労働者たちは家路を急ぐ
主婦はたらいみたいなパンを手をしている
誰もが一台だけの貨車のように
日々を生きている

目の下に誰もが
刃物でえぐられた傷があるので
それは知られる

つかのまの夕刻
イングリッシュホルンの艶めかしく

少なくともこの地の人は
月を眺めて
死を思うくらいの
たしなみはある

説教詩

社会に出てから
見知らぬもう一人の自分に出会った
卑しさも
醜さも
無能も
無思慮も
それまで否定したすべてが
あらゆる罪悪が、悪徳が
内面に豊かにあった
名付けられることのない下水のように

やがて知る
小さく神の名を呼ぶ
自分でもどうにもならない
神の名を呼ぶ人
それが自分と

するすると下りてくる
斧は教える
おまえは何も知らないと
根源の痛みしか
最後は死しか
おまえに何かを教えるすべはないのだと

知るがよい
生きるとは何かを得ることではない
失う中で目をつむらぬことだ
だいじなのは目あけておくことだ
だから目だけはよくなければならない
練達の漁師が
ひとひらの雲からでも
疾風のおいをかぎわけるように

(神の名を呼べ
死にたい気持ちを友として
神の名を呼べ
死にたい気持ちを友として)

射撃手は見るだろう
その精巧なレンズから
うなじの中心部に
焦点を合わせる
そのときはくる
最もきてほしくないときに
最もきてほしくない角度から
予期するなどかなわぬこと

軌道は予測されないから意味を持つ
ならば喜べ
願ってもない教えと
凶弾に倒れる意味を知れ

(神の名を呼べ
死にたい気持ちを友として
神の名を呼べ
死にたい気持ちを友として)

苦く重たい労苦を知らぬ者は
もう一人の自分に出会ってさえいない
ならばまだその人生は
はじまってさえいない

だから
人を見るときは顔と言葉ではなく
後ろ姿と指先を見なさい
もし心が熱くなったら
熱くなりすぎないうちに
コップ一杯の冷水を
自分の心にかけてなさい

ブダペシュト東駅

初秋を抜けると
一転して大気は針金
通りは打ち捨てられた運河
駅は廃墟の墓石

デンピンスキー通り

明け方

トロリーバスの
堅い地面を掘る
月がでている
血に染まる赤い空に
骨のように白い月が
呪われたタロットのように
明け方
母を求める
小さな子供たちの
いくつもの失望を乗せて

メズーサ——ブダペシュトのシナゴークにて

彼女はいう
メズーサに接吻しなさいと
目のもう一つの働きに
そろそろ思いを馳せるべき時だと
やがて月の時間がやってくる
血のような月が
チーズのように溶けていく時が
やがてやってくる
メズーサに接吻しなさい
透明な知性を遠ざけなさい
苦い涙を捧げなさいと

鎖橋

鎖橋に
鳳凰の雲のよぎり
市電の窓は黒い鏡になり
仕事を終えた人たちの疲れた横顔を
太古の英雄の
水のワルブルギスのように映す

そのときの雲
追憶の秋風に
吹き払われよ

そのときの蒼
吹き払われよ
ブダベシュトの鎖橋

レインコート団

音もなく
見ている
レインコートの人たち
カーキ色の顔のない一団
(明け方の風の吹くまで
見つめるのをやめないで)

濃いよもぎ色のレインコートに
夜のブダベシュトの霧のかかり
(明け方の風の吹くまで
見つめるのをやめないで)

無音のレインコートの人たち
合わせ鏡の果てからの視線のように
無機質な眼球を中空に漂わせ
顔のない空間から
うつろな漆黒の目
(明け方の風の吹くまで
見つめるのをやめないで)

窓辺にさく

レンガ色の花
まつげのかすかにうつむいて

上目遣いに問う

(今日ごはんは、どうするの?)

許して下さい

生活の苦しさからとはいえ

失望の涙を

あなたの頬にふりかけた

(今日ごはんは、どうするの?)

パンを与えてくれたのは

あなただったと知る

街を追われても

あなたはただ静かにわらっていた

(今日ごはんは、どうするの?)

くちびるは硬直して

ただ涙ばかりあふれてやまぬ

ポヘミアを覆う無名の雨のように

(今日のごはんは、どうするの?)

私があるを心配するよりも

あなたが私を心配してくれていたとは

そんなことも知らずにいた

(今日ごはんは、どうするの?)

私たちの日々の糧を

ありふれた悲しみを

この窓辺に

レンガ色の花の一本

乾いた風に吹かれながら

今あなたがやさしくわらう

ブダペシュト中央市場

ドナウに面した

トラム 49 番を降りる
東方風の薄いレンガに覆われて
市民の行き交う市場
雑踏に甲高い売り声

グーヤシュのつんとくる香り
アカシアの蜂蜜
豚のソーセージは焦げて
ハンガリー・ビール

男も女も
皺よる大きなおなかが健康の証だ
食事と酒が神話だった時代
名残をこの市場はとどめている